

氏名	かめの あきこ 亀野 晶子
学位(専攻分野)	博 士 (学術)
学位記番号	博甲第 704 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	蔵田周忠の思想とその実践としての「型而工房」
審査委員	(主査)教授 野口企由 教授 並木誠士 教授 中野仁人 准教授 岡田栄造

論文内容の要旨

本論の目的は建築家、著述家、教育者、研究者、批評家など多様な活動をした蔵田周忠の活動を通して、椅子座の受容に關係する住環境の変化に関わる問題を分析することである。分析は蔵田の個々の業績からだけではなく、思想や活動、その社会的影響、周囲の運動との差異を見るという、今までにない総合的な流れで行われる。

構成は第一章にて蔵田の活動期の歴史的背景の確認を行い、第二章で蔵田の著作の分析からその思想の独自性を探る。そして第三章ではその実践としての「型而工房」を取り上げ、その作品の持つ意味を探り、その上で同時代の他の運動との関係やその違いを明らかにする。これにより蔵田の思想と「型而工房」の活動とに新たな評価を与えることができる。

日本は西欧文化の受容が表れるまで、畳を用いた床座式の生活が当然のように行われていた。床座式から椅子座式への変革は現在ではごく普通のことであるが、生活改善や住宅改善が叫ばれた大正・昭和初期には、理想と現実の違いに多くの人々が戸惑い、時代に流されていた。

このような時代に生きた蔵田周忠の思想・行動から、社会や生活に対する認識と住宅や家具への先進性を明らかにすることは、日本の住環境の歴史に新たな一面を見出すと共に、椅子座式の家具・生活の受容に対する新見地となり得る。

蔵田の思想の独自性は「日常生活」に要点を置いたことであった。建築史の著述から見える蔵田の一定した評価は、モ里斯に始まる近代工芸に対してであった。その中でも工房としての機能を確立したウィーン工房と、それを社会へ組み込み教育機関として実験的要素も持ち得たバウハウスに対しての評価を、世界的な工芸・建築運動と切り離し、変わらず持ち続けていた。それは工芸が建築（住宅）と人々の生活を結び付けることができる力を持っているという確信に近い思考であった。

実践としての活動では、工芸（家具）を使った「日常生活」への働きかけを「型而工房」に見ることが出来る。「型而工房」と他の運動との比較から判明したこの団体の独自性は、①椅子座式家具の販売対象として女性を選び、②その販売媒体としての「婦人雑誌」誌上で女性に向けての直接的な啓蒙活動を行い、③その実現に向けての作品（商品）に畳摺を標準装備として付けたという一連の流れにある。椅子座式の生活を畳の部屋で可能にする家具を製作し、女性を読者とする雑誌で販売するということは、従来男性の公的接客領域とされた椅子座式の生活を女性の領域

とされた畳の部屋へ、家族が日常を送る「私」の領域へもたらすことを明確に意図した行動であった。当時の生活改善の流れを見てみると、この行動を起こした活動や運動は数少ない。生活をよりよくする椅子座の思想、椅子座式の家具、それを使用する人々への啓蒙と販売という繋がりを作った一連の行動は、工芸（家具）による変革に限れば「型而工房」以外にはない。それは「安い家具を丈夫にして実際に役に立つように合理的にして、それを大量生産でつくり、大衆を使って貰う」¹ことを目的とし、建築や工芸の理論や思想などに埋没することなく、「日常生活」に対する視点を常に持ち続けた蔵田の独自性である。

唯一残念なことは「型而工房」の活動が自身たちの生活を支える術となり得なかつたこと、またそのことを目的に入れていなかつたことである。百貨店の目的はものを売り、利益を得ることにあった。この視点・目的の欠如が、「型而工房」が継続し得なかつた理由の一つである。商品（家具）を使うことで生活に変化をもたらすことを目的としていた「型而工房」にも、活動・団体を存続させるための思索・方法を探る必要があつたといえる。

以上のように、蔵田周忠の「日常生活」を根底とした椅子座の受容に関する住宅や家具への視点と、それを軸にした活動を行なつた「型而工房」は、大正・昭和前期という時代において、その後世への具体性と可能性とを再評価されるべきであると結論付ける。

¹ 『婦人之友』24-3（婦人之友社、1930）p.98

論文審査の結果の要旨

本学位論文の申請に関して、申請者は平成25年11月29日に予備審査を受け、専攻会議の承認を得た後、同12月に本申請した。

本論文は、大正から昭和前期にかけての椅子座の受容期に多様な活動をした蔵田周忠という建築家を対象とし、その多様性が日本の室内空間の現代化への重要な道程となったことを浮き彫りにした点で、先行研究にはない独自性を持っている。また、第一章で蔵田の活動期の歴史的背景の確認を行っている点は、第二章での著作の分析、思想の独自性の探求、そして第三章での「型而工房」の作品分析、同時代の他の運動との比較を社会的視点からも解り易くしている。また同時に、蔵田の思想との関係性も含め「型而工房」を多角的に、また批判も交えながら歴史的社会的観点からだけでなく、デザイナーとしての鋭い目からも分析・評価している。このように多様な角度から分析を行つた研究は過去になく、非常に示唆に富んだものである。

申請者は蔵田の思想の独自性が「日常生活」への観点であることを強調している。それらを多くの著述や発言の中から抽出し立証するとともに、彼の教育活動の痕跡や「型而工房」の作品の検証によって具体的に触れている。視覚的資料の充実は特にこの論文の長所であり、研究者の目から見ても納得のいく構成となっている。また、蔵田が建築史の著述の中で、モ里斯に始まる近代工芸を評価し、特に制作工房としてのウィーン工房と、社会的な教育機関・実験工房としてのバウハウスとを重要視したことも強調されている。申請者はそれを工芸が持つ、「建築・住宅・人々の生活」という流れを結び付ける総合的な力への確信に近い思想であると位置付ける。これは、一品生産のように狭義にしか理解されていなかつた工芸というものに新たな視野を与える思想の萌芽の発見であり、非常に意味があるといえる。

申請者は更に、家具の販売や現代でいうプロモーションについても研究を拡大し、論文を非常

に独自性のある域に持ち込んでいる。「型而工房」の独自性は、椅子座式家具の販売対象として女性を選び、その販売媒体としての「婦人雑誌」誌上での啓蒙活動、そして商品への畳摺の標準装備、という一連の流れにあることを当時の資料の綿密な分析から発見している。そして、椅子を接客など「公」の男性の領域から、家族が日常を送る「私」の領域・畳の部屋へ広げ、移入した画期的な運動の萌芽であるとしている。同様の流れを持つ生活改善運動は家具での変革に限れば「型而工房」以外には見当たらないことを突き止め、これは活動の根底に「日常生活」に対する視点を持ち続けた蔵田の存在があったからであると結論する。また最後に、型而工房の長期存続し得なかつた欠点として、利益追求の視点の希薄さを指摘しており、新しいデザインがその受容期・萌芽期において社会に生き残っていくための在り方も示唆している。

以上のように、申請者亀野晶子は、蔵田周忠の「日常生活」への視線を根底に持つ住宅と工芸に対する思想、またそれを軸に、家具による住宅改善活動を行った「型而工房」に関して、これまでにない評価軸を設定し検証した点で大いに独創性があり、また信憑性も高く、学位論文として充分な価値を発見できるものと考える。

また、本論文の基礎となった研究内容の一部は、申請者による次に示す 2 編の査読付き学術論文として、すでに公表されている。

(学術論文)

- 1) 亀野晶子「蔵田周忠の建築思想の独自性 – 代表的著作を手がかりに – 」意匠学会学会誌『デザイン理論』第 58 号（意匠学会、2011）、意匠学会編、pp.49~63
- 2) 亀野晶子「1920 年代から 1930 年代にかけての住環境に関する運動からみる型而工房の独自性」意匠学会学会誌『デザイン理論』第 61 号（意匠学会、2012）、意匠学会編、pp.19~33